

○早稲田大学史学会・連続講演会

「わたしと歴史学、わたしと考古学」

(於文学学術院校舎)

第一回 二〇一三年五月二四日(金)

中世人の生活を探る―中世の家計簿から―

似鳥 雄一(日本史)

中国政治制度史研究の射程

渡邊 将智(アジア史)

古代史の魅力

櫻井絵美夏(西洋史)

日本で考古学をすること

大網 信良(考古学)

第二回 二〇一三年五月二九日(水)

近世日本の「鎖国」と「通信使」を考える

張 慧 珍(日本史)

世界における日本の中国史研究

小林 隆道(アジア史)

私とバルカン史

唐沢 晃一(西洋史)

エジプトとの出会い

竹野内恵太(考古学)

趣旨と経過

真辺将之

二〇一三年度早稲田大学史学会連続講演会「わたしと歴史学、わたしと考古学」が、五月二四日(金)および五月二九日(水)の二日間にわたって開催された。この催しは、一人でも多くの一年生に史学系の学問の面白さを知ってもらい、関連するコース・論系への進学意欲を高めてもらうというのがその趣旨であり、二〇〇一年度より行われはじめ、今年で第一三回目の開催となった。二〇〇一年度の開催当初は専任教員が講演を行っていたが、二〇〇三年度の第三回より助教・助手・非常勤講師や大学院生等の若手研究者に自らの体験を中心に歴史の魅力や意義を話していただく形式となり、本年度も日本史・アジア史・西洋史・考古学の各コースから、若手研究者二名ずつが推薦され、自らの体験をもと

に歴史学・考古学の面白さを語っていただいた。

講演で取り扱われた研究内容はそれぞれ多様であり、相互につながりを持つ話ではないものの、どの話し手にも共通していたのは、とても楽しそうに情熱を持って学生に語りかけていたことであった。それぞれの興味深い研究内容もさることながら、こうした歴史研究の「楽しさ」を、目の前で「実演」していただけることは、必ずや新入生への「感染」を引き起こし、歴史研究への興味をかきたてる一助となるものと考えられる。若手研究者の溢れんばかりの歴史への情熱に対して、一人一五分〜二〇分程度という時間はあまりにも短すぎるとの感があつたが、それでも手際よく時間内に話を収めてくださった講演者には感謝申し上げます。

思い返せば四年前、私自身も、二〇〇九年度のこの講演会で話をさせていただいた。その時の『史観』をいま手にとって読み返してみると、その内容の浅さには汗顔

の至りではあるが、それでも自分なりに、学部生が歴史の面白さと意義とを感じられるようにと事前に精一杯考えを巡らせたことを思い出す。私自身にとっても、歴史とは何か、大学で歴史を学ぶことの意味とは何か、というようなことを考え直すよききっかけになった。そして今回、聞き手としてこの講演会に参加して若手研究者の情熱的な語り来接することによって、改めて刺激を受けたように思う。その意味で、学生だけでなく、話し手の若手研究者、そして専任教員のそれぞれにとっても有意義な催しとして、今後もこの講演会が続いていくことを期待したい。

## 〈第一回〉 中世人の生活を探る

—中世の家計簿から—

似鳥 雄一

私は日本中世史学という学問の「面白さ」に焦点をしばってお話することとした。歴史学の面白さは何かといえば、それは当時の人々がどのように生きていたかを史料から掘り起こすことである。史料といってもいろいろあるが、「歴史学」といった場合にはまず紙を媒体とした文献史料をあつかうことになる。そこでどのような文献史料をあつかうかが大きな問題となるが、ここで紹介したいのは、この業界では敬遠されがちな帳簿史料である。一見すると退屈な数値の羅列にすぎない帳簿史料を題材に、そこから垣間みえる中世人の生活のあり方を探ってみたい。

しばらく前に巷では『武士の家計簿』

(磯田道史著、新潮社、二〇〇三年)とい

う幕末〜明治の帳簿史料をあつかった本が話題になったが、中世にも家計簿と呼べるような史料がなくはない。今回紹介するのは家族という意味での「イエ」の家計簿ではないが、中世では荘園のことを「荘家」、寺院のことを「寺家」といったりするもので、そこで作成された収入と支出の帳簿を「中世の家計簿」と呼んでおきたい。

まず史料一は、備中国新見荘という荘園の家計簿である。この荘園は現在の自治体でいえば岡山県新見市にあり、岡山駅から特急で一時間、中国山地の中央、もともと奥深いところに位置する。京都の五重塔で有名な東寺が領主となっているが、室町時代になると荘園現地の経営は代官に任せており、その代官が応永八〜九年(一四〇一〜〇二)の収支について作成したのが史料一である。なお史料にみえる銭一文はごく大雑把に言って現在の百円程度と考えてもらいたい。一貫文というのはその千倍なので十万円程度ということになる。

支出費目をみていくと、生活必需品の購